まゝ花の梅

下

へ 13
2919
12

へ13
2919
12

昭和九年
六月十八日
購求

春色籬廼梅巻之十二

東都　狂訓亭主人著

第三回

世の苦労をば花の言葉にてまことに一ツ苦労のとやら一昨日の山風と八橋舎の人々秀逸ぶりて実に花のごとく人世の中の苦労も通ふ人情の寄ちがひけり須臾の間の空景日暮なる花の山名ぶり賑やかなる大悲閣御山の中ふ才一の新ぶり清き清水の葉蔭ぶ佳木の花見の群集花見小供の

花見と郡郷男女ら貴賤ともうるはの品定め合ふ
時〳〵連の人貴賤の友達さそひくに楽〳〵たのしみ
もうるる神社右と左と招き迎へ花の木の元花毛氈のかけ
なる香炉場設ける人うは花の香もうけ花の木の
酒の吸筒弁当体らく客の千中に三四人なる女連の木
の者ら知らねども別で同木立一人の娘年はたらく十六七
頼客の見業ひさやうらいはも堅ろう十人宮の貴きの
今日山内は銭まくら花見に娘の中に似たるひとり

小町娘男原業の精霊うと銭ばかるる指のうち人なう山方に
体らく三四人は富士様の臭さよ達色黒うこの業平自慢業
平物語のは男絵次第ざる風の人う交う酒の機嫌にざれ
言の争ひわく仕手同志「ヨイ〳〵」此調変ぶ山春桃ぶ
のうう雲梅に文晃風の鶯ら山鶯風ら形に紅ぶ模様
風ぶぶ久保山身は今調変に落しうう手ちうを貸て春
まらく花〳〵や十分弄〳〵言てその上で借て春のうめう
紙気性ざく〳〵此身の極る敵役ぶ左のでぬ

男が指別往見へるのゞアナ何ぞ者ゐるせんト言ひながら櫻の
木の根の高〳〵やうる所で烟草の吹がらをせこ〳〵きせづ〳〵
烟草の厚骨ぶ拾て居ゐる。「イヤとまた大きまらう
きさ「コヤ何をしこのゞ。「エナニサ花曉さんの烟草を借て居者
の方を何処へうろ〳〵ナ。「おゝ花曉さんの烟草ドヤア大
変ごゝの烟草でゐひらう〳〵ちゃノ悪ひぞ。「花〳〵烟草を
〳〵せバ此羽織を差上るゝ。「何程〳〵。「十羽織を
差上るゝ。「ハヒ烟草の代ゐあゝ有難仕合の

粘仕立物ごゝのウ。「ハヒ有難を〳〵せるさんゐ自分ゞ手拭
ゐのごゝう男て〳〵〳〵。「コヤ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵
野暮ゐ宣流をゐるゐで野〳〵烟草を見付ゐせんナ
生〳〵中へゞ落て居ごゝう。「ハヒ〳〵ゞ〳〵探〳〵
見拾ト立ひゞう居居生〳〵せんゐを彼方此方とゐれバ
連の友達も清〳〵ゐ居ね歩行を花曉い温ゐ
云ゐ〳〵ゐ程ゐよ。「千程一張人が拾ひゞゐゐ
ゐ拾て金ト一人居るゐ花曉

傍ふ人るき初へ向ふ体ゝ彼娘ハ母の同ふ人花
暁の側へ立寄ゝそ人ゝ娘「モシアノウツクシイ烟愛ハ貴
君のでゞざわまたふ長今私の様のよ人ゝ嫁ゝ参ゝまらか
どりいさゝ屋りまゝくゝたゞ貴ゝ君の花烟愛の様ふ
ゝる作のゞ周えまゝくゝ持て参ゞまゝくゝ宮ふ程山烟愛
でざゞわまたふ五ト完名ゝ教ゝ乞ふ乞ふ烟愛
の丙肩花暁ハ烟愛の丙ゝ長ゝ娘の顔を後容ゝ
視て早ゝ風の花暁雪義慄ゝ恐ゝる花の

兄貴ゝ蓉の花娘ハ顔を赤ゝ染ゝ烟愛を花暁のゝ様ふ
波ゝ言葉ぎけるふ立別ゝる指ゝ連の女達ゝ烟愛の
詩を立て娘を伴ひ桃桜の赤立をやゞり行ゝる花暁ハ
本ゝ意ゝ見遣れゝ群集ふ絃ゝ見ゝ風情を見遣る
友達ゞ「言ゝ花暁さんも烟愛ハ独る様人を伴やゝさ
イヨ「ものやゝりあわゞ」行ゞあの娘ゝ長ゝ烟愛ふ呼ゝけて
来ゝ立ゝ平川いゝゝゝい呼れふ立ひけゝびゝ川ゝ
行のゝ人ゝひ臭ゞ花暁さんと彼娘の婦人ゝ招る

桂孝

物さ〳〵トキニ彼娘ハ何者ぞらの　〇然ハ何でも機織奥ふかく入
娘ごそ〳〵て人目ガ絶ッて好風さらら　〇勝りし美娘さらら
宵ハ入るゝ　〇何故〳〵　〇ニサ狐ども知るひテ〳〵ゴミ
古ひ酒蔵ぞ　〇ナニサ狐ども知るひテ〳〵ゴミ
きひといふのぞハナ　何ぞも垣根のゝさあるる風儀ぞ用ゆ
と偽ハ用て居るゝやアるひら　〇然ハ何ノウゝ乳ガ付て見ル人
管入娘の野暮らゝい望ゝ　〇くろゝい所もるゝ酒蔵さ
風俗て人目ら絶ゝいづゝ　如左るい娘さらら　〇丈ハいろ

花曉さんガ彼娘ゑ視物て忙然として居るゝ可笑じゃア
るひら　〇そまでゝらても烟草を拾ッて来と礼と言ふ
ゝ乳ふ何ぞ何ぞ行て仕ま河さらゝ乳の毒でるゝるひハナ　〇左
様ぞらゝい美娘ぞらゝ乳の毒サノ　〇悪女るとバ礼と不言
ゝ乳ら彼娘でハ何ぞ叮嚀ふ接拶をして住ゝ何所
だら経国て来さらゝさらゝ　〇あとを線ふ尋ねゝ行と
娘ぞ乳ゝ出て来て貴ゝ君ハ何ぞ花見の用ふらゝ
お方さゑ能ゝア　尋ねて来下ゝさゝ幸ひ今貝ハ毎人ゝハ

觀音さまへ參詣して私一人でござゐますれバ何卒此方へ
お通り遊ばして下さりまし「コレ〳〵然らバ行バ神ら
男ひの外ニ丈夫でも持て居るとつまらぬぜ花「何ぜナ
面白くもねへ誰が手前さんそんな気をもんで尋ね出すものか
馬鹿らしい▲「サア些とも場所を改て他の花を見物
するがよい×「それもよからうサア〳〵ト香泉休所の代を
置き此所を立去り未見花を詠めんと山の北路へ赴く
折しも酒狂人の乱れ着の又ハ喧花のころ〳〵ねど自身を

振て群集の中を切抜れバ無法の騒ぎを結めんとする
人の喧花の相手ハ知ざれども血ぶるひするもの一人も
おりて騒ぎさわぐ貴賤の男女山崩を立つる落花狼
籍彼方此方へ逃廻る娘の供人此の更ニ途方に暮れつる木の
根に爪突き倒れ転りて山より下へ落るもあり多く人の連に
はぐれと別れて途方を失ふ手中に彼花暁も連に別
れて見えぬ尋ねかくして込合中を押分かきつつ行所に
倒れて悩む一人の娘立上らんとする折から又〳〵ワアート

人をすゝめて此所へ近付向双の光りを立込押合拝殿の
くゝ狼狽まゝ逃退んと人を突退踏倒し後きハ乾板
弱きハ物ハ怪敷をきるめり目を引付髪中かるゝ
けるハ脱ル今の人倒るゝ姫ハ泡を吹き手端の位義消敷され
もきる程なるを花暁ハ見届て引起し肩ヲ引廻傍の頃れと
押分山内の土産中の産の外興ひの本堂のうゝ退れつゝ狼狽
いとり白を見まハ毛先刻の狼ゆゑ不思義ゑ泡と知ル鏡
必抱常体なゝぎる河も頃狼の外ハ人も散乱ル有も

所へ影ゝ見へ見へ見へ所ハ所ハ所ハ所ハ
るとこれ付き相俣ゝ頃狼と戦て住手人姫を助け
呼へ方寄ると三四人の男女　ヨヤ〳〵お嬢ハ此所ハ
松どもハ〳〵の狼ゝ苦労をして尋ゝ知ませんヨト言
ども狼ハ打寄ゝ共ゝ只アヤ〳〵言ゝ安ゝ言
言ハ内ハ花暁ハ若者を言同せ別とされハ言ハの女
五郎ゝ丈ハ丈ハ丈ハ丈ハ
ゆゝもゝでんゝませんゝ伝接ゝ真ゝ

出家して世をのがれ侍りしと言ひ侍りし花曉の姿を見るにつけ家柄の
極まる男にて家富み豊かなるの出立人柔の程風俗自
然なる大家の息子若旦那なれども極まる様の好男子にて通
ると見てとる年頃女は知れるべき苦労人にてひとりけるに
ものもと貴君人私どもは大とくやの花見の者でござるまいが
只今の騒ぎで大勢のお女郎衆が皆〳〵風切りまして付
添ひと者が御〳〵のるて怪我をさせるのを恐れまして退きまして
此娘が一人見のでご覧ぶ手まるまして身れ共ばでござる

まして貴君のお教さるでこの娘の命も助りまして極る
あの見ぶれをいくさのひけをしべるりませぬ仲平家門へ
お連申てこの娘のお内へ貴君の心信切と同せるでござる
まこと有難ござる入ませ人家へお伴をいたしてござる
まこと一度の花曉ぶ判して様をなる　宮
まこと一度の娘も知れずやこの花曉ぶ言ふ娘の
ぶ知りなりこざること親ぶ赤ふして言ふ娘の
情を曉し縁を結べべき仲平の約束ありしの為に別とも
良縁春の遅ひ弥に娘もまあ人ぶあるこざる家の内地の

新造あるべき宮を拝見まゐらせんバ世世代代の男女ども代代
見てく花暁と雲暗ふ名さび礼のろふ盛と言も酒落う
廊の舞面白ふ入ふりーべ金ふ富て弟目宝ゐく事名
ゐまどもも数花のち地の紫も月貫の日本橋ふ近き行
の東ふよ湯ふぬ九住の鳥ようんバ船て乗ふ流八清
入相の鐘ふ候そうる花の廊ゐ住ゐ八是花の山ふう東道立
禁の町を通ぎ豆清重亭家見ふて家来稽舞の遊来
見返り程ふて寄ぶ窪ふいろうける

第四回

私奔私行の酷想八悪ふも両個ふ一賀ゐ九別ふ子に
不変夫婦の情合他念ふくくハ情ふ迷ひ罪もゆれ
きふふふ思ふふんふ悲ど世ふるの男女ども思ひ初ふる同
ゆハ赤の赤ふ山浪越さーと新言を言ざるふの中ふ新ども
行義義理ゆふふ俺ハ離別の中ふふふも他見ふ見て八表
場ふ甲斐ふる者と傍ふ面色ふ九意ふる人ふの丹城と九意
ぶふふ節ハ安ふふの神の力を借ふと生屋夫婦ふ遊ふ

遺るべきを思ふに公務くして漸く逝く百年の文藝
なり一世の情人絶てなつかしく昔よりして言ふに最も情
きはまるべしや再説も花曉を伴ひし人義ぐ遊の里に
名も高き大國屋唐助なる人猫家の人くみて家の嘉
例の婦女の花見花見を尽せり伴ふ今日の一つ人なり
なり鶯ハ花曉ハ野春なるべし彼新嬢の返礼み
うまらべきを思ふ民を捨てを第りを思ふ先相方
を承定嗅女を揚て一奥を伴きんと奥一所彼新嬢ハ

代横ゆて弟一の全盛葛三助の妹女郎お雪といまさと内
所へ引移るべき理なりて葛三助の古活さる内所ゆて三
ふの世話ゆて在けるべき老女お繁ハ兼て意恨を
ふくむ変なりこと生き郭屋ゆ居るべき先刻より行方
と言をの所て居る　たとへ行方ゆくけるゆりても他ゆ
引ぬきて来るべきぞ　花見ゆ出ぬ掃ふ客を
まと長助ゆも市ゆ傷ゆ　ゆ

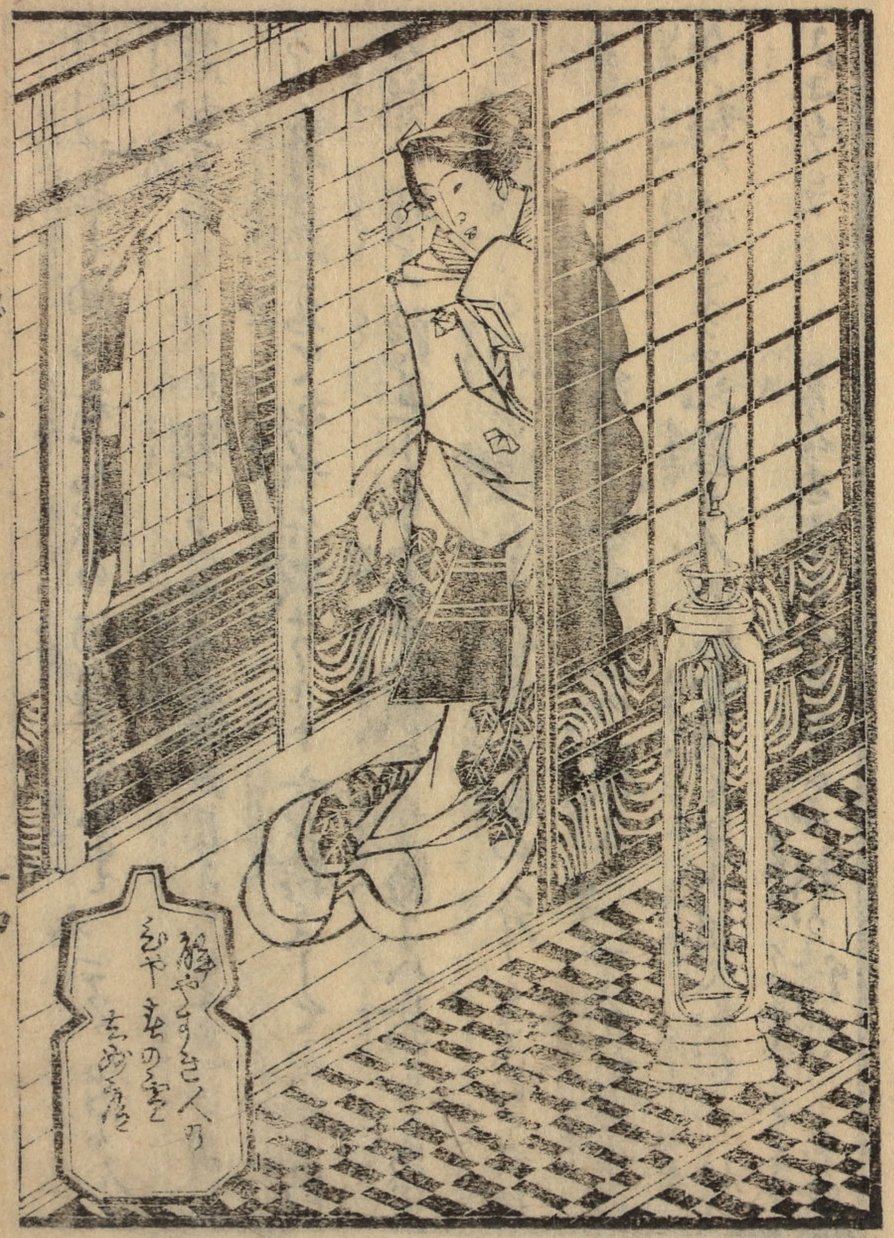
ぜんごいろは年も不行　内所ぞうの臭ぐろしいく
ぞくひして海もろ珠は仕る伸く町の吾名屋の内うち
言込んで来るとお客人隨ふ始終のあるうお人らしうう
私ぶ奉込で返るをしるこのは千臭の不入男ぶ
で羅舞を分てひろて仕舞て今日ハ途中で物とお人
うはいべ直ふ引連てお客ふして先度ぞんぞと千私る我
保ち所為を今ぐうぶさまちやア私ぶ役義が前ふらま
るひ様う千臭勝ぶぐらうト雑ふいちやふ猛くしく

十二

十西ぼくうて屋る氣を通うくるまを代新桑の市場と
いうを吾止ふ　ヨイ〳〵市場ぶん今の仲のお客をば
広河の一番もよくうべ祝ひれを中て保ーーーぶ直に
女郎衆とおれのお留守のとうくうハ生てるうまぬョ
市ハイまるー隨ふお人品の祝名目郎らしくふ祝名を
ヤてもおるやうるひうまお客ようしとうふて何ふるう逢の
を私ぶ公者でる　〳〵ひるうるあるうあるうナ我
あて注を合方ふ知ぶ人と言のぶヨ知ふあるるひ風

ちんの御ふ雪ふ よりやすく〜しく やうふとのへ あわらんへ元
来 新(しん)(ぞう)元 ゆもあつまやア 乃るまの 市イエナニ今体雪
さんの世人新を故りて ぶしとあれをまうといりてあれを
まつこのごろ 三ア 見も角もお雪さんをおあふおりて
イヤ〜 まつまやア 笑して 出来るひょ そ形ふ三ア 物ふまを
さまとそうるのうお雪さんの世話ふ ありとあれとまう
の人格別直ふ 殺(せつ)(ぞう)と 今方ふ やりて お客ふとりへまへ
私が ふ義ふ ごト 一個 眼ふ角を 立 邪チ とまさんと

仕ようける
思ふ伝ことのまへ 今頃 無理成 合ふ ふう〜 度中成
言ふ〜 客人 お怒ふ 働き 仕ふの 金をまへんまを
揚ふ ようふ 至今 所 お雪ふ 屋の表 初の 表まへ
悔〜 思ふ 客中ふ 好男ふ ら〜き 花 暁を 客ふ
さんとまうとむづう〜 他言を いふうふ人 あまを
名ざ〜 出て 言ふう 客のうも 遠く 分解うふ
次巻ふ あるふ



此時萬〻助の兄お鶴の親御様も来て
鶴お言葉をきゝ
うり生姿へ嘉て
お鶴ハ病よ陽もども家のお蔵の今盛ゝハ
もべむ〻くと類を腔らし〻萬〻助の
兼てより強く兼る あのゆうんの復立 著「アノそれお鶴どん
今私ハ関ようよ お雪さんのお雪のゆゝ付て
山ふかゆまり〻〻言ゆゆを
きんの方でゆ〻〻ゆゝハお雪さんを今方ふ
同達ゆ ゆゝ
るゆゆ
ゆゝ
ざるを孫に花暁さんの人品を
ざるゆ ハイそう長屋
おゆゆ

あるひのホトゝぎす　言てあるかしもあて花暁の町
深の揚屋　仲之町の一文字屋そとわゝせのありけ
まゝ　畳遠ホ二階へまり　花暁の御客ホ遣入　文ハイキ
ちまち　若旦那　経今月ハ　ちるる入まし　係ちの級あ
雪ホ下ませ　なんぞう　ホ今　お使でぐるまし　ちゝ
て春ぐまし　書申ホ送り　着も　特ちまし　人で知ち
の事ホの　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ
るゝ　花暁が　行屋きしろ　廻　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

年代もこゝを賞　又男風俗の　當世　ちるホハ　多ア後見合
新廓の　ホ　ホ　ホ　廊下の　脇ホ　ホ　助の耳ホ入
けまハ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア
何ホの　何ぞう　初まるひと　見ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ
だゝゝ　内所へ　関えても　化らる　相ゝ　ホ　ホ　ホ　ホ
ホ後ゝても　お雪さんハ　私ゞ　頼ゝと　明ざる　ゝ　ゝ　ゝ
お　ホ　ホ　言ゝる　移ゝさせる　ゝ　出川て　ゝ　ゝ　ゝ

ト　たしなまさまで遣手のお慾心の中ハ悔しけれど花
暁の身の上名流にて文泰が慕ふすのむつびなど紛飛
をいふべき据るけれど下東あづかに葛く助人得よく挨
桜をしてあるくと部屋へ帰り通る新造禿を白眼
何がブツ／＼口中に独言消えかゝる火鉢の火を鶴逸紙
にてあふぎ立灰だらけにする魂面火鉢の端に笑しき
面をすし気も勝しき其風俗大昔の遣手にて今世
の小町の廓にハ薬にするとも尋ねてもあるべき

そ
京なれバ今の遣手ハなまぐくお慾の大昔人ありと三五亭
春馬先生に聞より再説も其夜の別れてハいへりしの
閑寂に語りし為毎くの勝言の素を知りし其中に
不思議にも縁ありしの結びとなる花暁お雪が閨門へ仕る
ゆて唄ふ古き小唄
「むらのゆふべの鐘に流にとふの雨
濡てあくろぶ山桜花が散りゆく縁の外
ト唄ふを聞付「ヲヤ今まで八放心と笑て居ましたが手

アノ花ハ　こうめの縁ゝ　とつくの八丁堀　今日私が花ノ木
番ハ　て　お月様　お月様　てけ　梅の木　蝶しゃ　ひらひら　成イ
高さのこと　同じ　梅なことざるの　花ハ　蜂ハ　名残　お番と
私の　宿　とこの八　左様　でなく　宣呪　あり　て　私ハ　友達　不敢
見る　番も　傍軍　ハ　て　丈ケ　私ハ　逢て　疾ク　暮さ
のごとく　アノ　二株ハ　唄ハ　ちやア　ちやア　雪ハ　ヲ　ハ
行と　花ハ　宣呪　ガ　ちこの　縁ゝ　とつく　又　疾ク
もつ　縁ゝ　と　言ハ　ケ　ハ　ば　ちこ　ハ　ハ　そ

でも　家　初ハ　貴　ハ　も　私　も　花　見ハ　ハ　て　見　ハ　ハ
則　花ガ　蝶人　縁ざ　ハ　ハ　ト
言ハ　雪　原　花　の　白　ち　ち　の　実　業　ハ　代　頂　流　紅　顔　の　ハ
花　橋　と　ハ　化　粧　水　を　拭　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
梅　の　林　ハ　風　ハ　如　く　情　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

春色雜巾梅巻之十二終